
二酸化炭素から血の臭い

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一二酸化炭素から血の臭い

【Zコード】

Z8047V

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

本格怪談始動。台風×号流のホラーをお楽しみに

上編 少女の不吉の自殺

2010年5月25日、そこには一人の少女3人と少年がいた。

「なんか変な臭いしない。」

「確かに、鉄の臭いが。」

漂う「酸化炭素」という目に見えない物質。ドライアイスにすれば見ることができるが、臭いはしない。

しかし、鉄の臭いからして血の臭いの可能性も考えてもいいのである。

その臭いは、謎の民家を通過すると消えた。

「この民家を通過した後、臭いが消えた。」

「ホントだ。この民家なんか不気味じゃないの。」

「行つてみる?」

「止した方がいいわ。」

田中という少女が、一人の少女、金沢と輪島に言った。

少年、浅倉も気になった。

「あのー、4人は何をしているのですか。」

一人の中年男性が来た。

「「」の民家のことで気になつていて。」

「あー、この民家なら廃墟と化していますよ。昔、山戸さんというお宅だつたのですが、その山戸さん4年前ほどに謎の病死をしたようなんですよ。頭部が思いつきりはげができていて、右顔がやけどを負つたかのような跡と、右手の小指が抉り取られていただけでなく夫婦一人ともそのようになつて体の一部が挽肉の状態になつて死んでいた。そのため、此処から、二酸化炭素に血のにおいがするのです。あちらの方の家は不吉に巻き込まれたくないという理由で引っ越してしまつたのです。」

4人の背筋は、寒氣をするかのように震えた。

「そんなことがあつたのですか。」

「それも、ネグレクトした少女の自殺による怨念がこの場所に漂つているため、入つたら死ぬといつうわざも漏れだしているのです。」

4人は、怖いのと同時に好奇心がわいていた。

しかし、のちの好奇心が仇となる運命を作り出す。

浅倉は、中年男性に少女のことを聞いた。

「その少女の死因は？」

「どうやら体の一部が挽肉になつていていたことです。」

浅倉は、顔面蒼白してしまった。

輪島は少しよろけた。怖いだけではなく死因とその両親の死に方が一致していたのである。

その少女を慰めに行こうとしたと考えた田中。

「駄目よ。呪い殺されちゃうよ。」

金沢と輪島と浅倉が必死に止めた。

中年男性も少しあわてていた。

「行くことが許されていません。近くの神社の神主が此処を封鎖するようにと警察関係者に説得して封鎖させているのです。」

Keep out立ち入り禁止という黄色のロープがまるでその民家の唄みをお札のように封印していた。

上編 少女の不吉の自殺（後書き）

次回 中編その少女の悲しき記憶。お楽しみに！

この作品のOP & amp; ED主題歌は、ピクシブの小説の方で発表しますので楽しみに待っていてください。今回の作品と比べてほしい作品が竜騎士〇七さんの「彼岸花の咲く夜に」という作品です。あちらもダーク感があります。結構、怪談の腕も上がってきたように思える今日この頃の自分。竜騎士さんとは、怪談ではライバルになるつもりです。

中編　その少女の悲しき過去

その少女は、親バカな両親に育てられていた。

その親バカな部分は、その少女を周りから隔離していたことである。

外へ出ようとなれば、親が引き止める。

上手く外へ出たとしても、帰つてくれば虐待が起きる。

そう悲しみの連鎖が怨念を募らせているのだ。

やがて、彼女は決意をした。

小指をえぐり取つて、苦痛に耐えた後、遺言を書かずに飛び降り自殺をした。

恨みと呪いたいという気持ちを持ちながら・・・

挽肉となつたその体は、親達を悲しませた。

しかし、2ヶ月後・・・

呪いが始まった。

両親は、家中でもがき苦しみ死亡した。

そしてその家からただならぬ呪いのエネルギーを感じた人々は、その家を封鎖することにした。

中編 わの少女の悲しき過去（後書き）

次回 下編 最悪の結末は誰も気がつかない。お楽しみに
次で最終回です。

下編 最悪な結末は誰も気がつかない

田中は、その少女に会いたいと思い、みんなが帰つて行つたあと帰ると見せかけてその家に向かつた。

「立ち入り禁止と言われていてもそんなことばかりに気にしていたらその子がかわいそうだ。」

立ち入り禁止の幕をまたいだ田中は、家の中に入つて行つた。

「大丈夫だよ。怖くないから」つちに来てよ。」

しかし、田中の足には呪いの痕跡が残つた。

田中はその少女の部屋に入つて行つた。

その少女が原因を作つていたわけではなく、夫婦が原因を作つていた。

「少女の名前は、いとも絃萌ちゃんという名前か。」

その少女の名前を言つた田中は、左小指から激痛が走つた。

そして左小指から血が出始めた。

「いや、なになに。つむりでしょ・・・」

錯乱に陥つた田中は、絃萌の夫婦の声を聞いた。

「我が子は渡れない。」「連れていひのなら殺してあげる。」

山戸絃萌のよひこあやだりけになり、体の洋服のあからからが破けている田中。

「嫌だーー。」

そして窓から転落してしまった。

「しまった・・・」

田中は、絃萌のよひに挽肉になり、遺体となってしまった。
誰もその場所に近付かないということから、遺体は放置されたままである。

そして7ヶ月後、その家は悪霊退散をされて取り壊された。

しかし、田中の左目から涙が出ると不吉な前兆として恐れられてその目は放置されたままであった。

完結

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8047v/>

二酸化炭素から血の臭い

2011年10月17日18時00分発行